

●語源

ヒノキは神宮の建築に使われたことから、天照大神の建物を造る樹木として太陽の木すなわち「日の木」、あるいは神霊の木すなわち「霊(ヒ)の木」と呼ばれたことからヒノキとなったといわれています。

古代文学の土橋寛によると、「ヒ」は霊力そのものを表す言葉で、たとえば「タカミムスヒノカミ」は万物の霊(ヒ)を自然に生成する(ムス)神という意味です。ですから、ほかにも「マガツヒノカミ」「アマノヒホコ」のように神の名の中核として使われます(土橋寛『日本語に探る古代信仰』)。

そういう意味をになった「ヒ」の木というわけですから、ヒノキには強い霊力があると考えられていたのです。

西洋ではヒノキは日本のイトスギに当たる Cypress ですが、日本のヒノキの英名は、そのまま Hinoki で通じます。それだけ特別な木としてあつかわれているといえます。

●生活文化

ヒノキは良質な木材になります。建材として最高品質のものとされ、正しく使われたヒノキの建築では1,000年を超える寿命を保つものもあっていわれています。ですから、総檜造りといえば、日本の家屋の理想とされてきました。

この理想は古代から始まっていて、特に寺院や神社にはヒノキがよく使われました。奈良の法隆寺は総檜造りでした。平城京の建物にもたくさんのヒノキが使われました。これらのヒノキは今の滋賀県信楽の森から伐採されたもので、平城京造営でヒノキが使われつくしてしまっ、いまではほとんどないということです。

近代になると、全国的にヒノキは不足してきて、平安神宮の造営、薬師寺金堂の再建にはヒノキが不足、トウヒが使われました。また、東北ではヒノキの代用としてヒバがよく使われ、全仏山青龍寺五重塔、弘前城天守閣などにはヒバが用いられました。

檜皮も、伊勢神宮や出雲大社をはじめとして伝統的木造建築の屋根を葺く屋根材として珍重されてきました。大木にならないと檜皮が取れない



総檜造りの法隆寺

いので、寺社が主体となって植林をおこなっているところも少なくありません。

●神話伝説

日本書紀の第一巻神代上に「木の起源」神話とでもいうような話ができます。

素戔鳴尊(スサノオノミコト)が「韓郷(からくに)の島には金銀がある。もしわが子孫の治める国に船がなかったらよくないだろう」といって、船をつくる材料を作り出します。どうやって作ったかという、体の毛を抜いてふりまいたのです。

顔の髭を抜いてまくと杉。

胸毛を抜いてまくと檜。

尻の毛は槓。

眉毛は樟。

こうして、4種類の樹木を誕生させたのです。

そして、「杉と樟、この二つの木は船をつくるのによい。檜は宮をつくる材料とせよ。槓は青人草の奥津棄戸の棺(現世の民の寝棺)をつくる材料にせよ」といったと記されています。ここにも、ヒノキがもともと神社建設の材料としてつくられたという起源譚が見られるわけです。

西洋にもイトスギの神話伝説があります。

古代ローマの詩人オヴィディウスの『変身物語』によると、太陽神アポロンの寵愛を受けた美少年キュパリスは、ニンフたちに捧げられた金の角をもった大鹿と暮らしていたが、誤ってこの鹿を槍で刺し殺してしまう。そして、この死を嘆いて、アポロンの慰めの言葉も耳に入らず、永遠の涙を注いでくれるよう神々に望むのでした。そうすると、やがてキュパリスの身体は緑色になり、しまいには常緑の樹木イトスギに変身してしまったのでした。このときから、イトスギは深い嘆きと慰められることのない悲しみの象徴となったのです。

また、古代ユダヤ教の伝承によると、人類の祖であるアダムが死んでヘブロン谷に埋葬されると、その身体から三本の樹が生えてきたといわれます。それらの樹は、レバノンスギ、イトスギ、マツあるいはヤシでした。それは、大天使ミカエルが、アダムの罪——それは人類の罪でもある——の贖いが成し遂げられる時は、アダムの墓に生える樹に由来するであろうと告げた、贖いの樹だったのです。それはまた、父(レバノンスギ)・子(イトスギ)・聖霊(マツ)の三位一体を象徴するものでもありました(マツの項目参照)。このなかで、イトスギは死を象徴するものでもありました。それは、アダムの贖罪が成し遂げられるとき「子」は死ななければならないからです。

実際に、その「子」にあたるイエス=キリストが十字架の上で死んだとき、その十字架はレバノンスギ、イトスギ、ヤシ、オリーブの4つの樹でつくられていたと言い伝えられています。このとき、レバノンスギは不死を、イトスギは喪を、ヤシは復活を象徴したものであったといわれています。イトスギは、ここでもやはり死の象徴なのです。

●文藝

和歌：

いそしみて 君がうゑたる 檜の木山(ひのきやま) 春日てる中に 立ちつつ思ふ 土屋文明
あかつきの 赤き光に ひとつの 檜たちつつ 尊かりける 佐藤佐太郎

峡の雲 はれゆく見れば 檜木山(ひのきやま) 黒黒として 重なりにけり 島木赤彦
かへるでの 黄葉(もみじ)のうへに 日もすがら 檜ちりつつ 時雨るる頃ぞ 山本友一

随筆：

前登志夫『吉野紀行』

「斧取りて 丹生の檜山の 木折り来て」と『万葉集』にうたわれているが、吉野の檜の良材は高見川の流域と、栗飯谷・広橋の奥地や黒滝川の周辺に多い。戦前までの山上参りは多く下市口から広橋峠をこえて…清水の柿峠をこえ栗飯谷に下り、寺戸・川戸を経て小南峠の道を歩いた。夏ともなれば終日法螺貝の響きがこだまし、夜通しチンチンという鈴の音がたえなかった。

牧野和春『樹々の風貌』の内、「富士の樹海」

すぐ隣りに、ヒノキの巨木が時を癒轟たように突っ立っている。一枚の葉すらない。裸木となつての立ち枯れである。白く変つた立ち枯れのヒノキの肌に、なにやら折重なつて棚状のものが見える。それは裸木に生えた黒い毒タケである。そのタケに、数条の紅色の線が入つて動かぬ。不思議に思つて近づくと、線と見えたものは、実は名も知らぬ虫なのである。死んだ巨木を温床に生える毒タケ、そのタケにたかる赤い虫。これを筋書きどおりの自然の輪廻と割切つて、人は安心できるのであろうか。

●美術

日本画でもっとも有名なヒノキの画といえば、安土桃山時代の絵師・狩野永徳(1543-1590)が描いた「檜図屏風」でしょう。圧倒的な量感をもつたヒノキの巨木が屏風の画面いっぱいに描かれています。



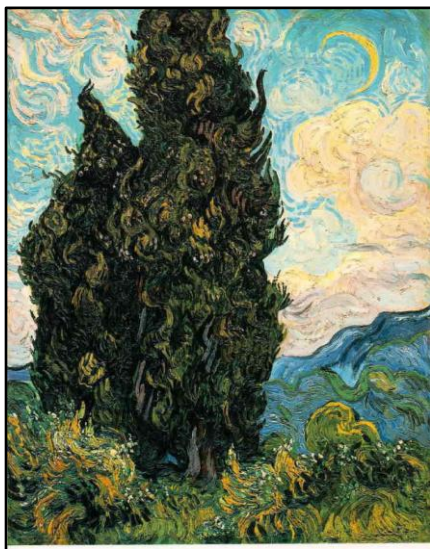
狩野永徳 檜図屏風

オランダの画家ヴィンセント・ファン・ゴッホは、「糸杉」「糸杉と星の見える道」など、イトスギ(日本のヒノキに当たる)を題材とした絵を数多く描きました。

前に書いたように、西洋では、古代ギリシア以来、イトスギは冥府に捧げられた木ですから、ゴッホは、つねに死を見つめるという意味をこめて、イトスギの絵を描いてきたものと思われます。



ゴッホ 糸杉と星の見える道



ゴッホ 糸杉